

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03096

研究課題名(和文) 小児期を通して行う慢性疾患児の自立に向けた看護療養支援システムの構築

研究課題名(英文) Construction of a Nursing Care Support System for Independence of Children with Chronic Illness Throughout Childhood

研究代表者

野間口 千香穂 (Nomaguchi, Chikaho)

宮崎大学・医学部・教授

研究者番号：40237871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は慢性疾患児の自立に向けた療養支援モデルの臨床適用と普及を目的として、慢性疾患児の自立度確認シート(Self-Reliance Check and Support Sheet：SRCSS)を活用した看護実践のために看護師対象に学習支援プログラムを実施し評価を行った。学習支援プログラムはARCSモデルを基盤として開発し、看護師35名が完遂し、成果指標とした知識得点、療養支援行動得点、動機づけ行動得点はいずれも有意に増加し、慢性疾患児の自立にむけた療養支援の看護実践が促進された。看護管理者の面接調査からは、自立に向けた看護療養システムの構築には病棟特性を考慮する必要があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

慢性疾患児の自立に向けた療養支援は、発症した小児期からの子どもと親の両方に年齢に応じた支援が必要である。本研究で開発した学習支援プログラムによる学習によって、看護師が自立度確認シートを活用した自立に向けた療養支援を日常的な看護活動の中で行うことが可能となることが明らかになった。このことは、慢性疾患児の自立に向けた療養支援システム構築が求められる現代において、その中で行う看護師による支援モデルを示し、慢性疾患児の年齢に応じた子どもの療養行動と家族による子どもへの支援行動を支援する看護実践の質の向上に貢献する。

研究成果の概要(英文)：In this study, for the purpose of clinical application and dissemination of the model of care support for independence of children with chronic illness, a learning support program was implemented for nurses for nursing practice using the Self-Reliance Check and Support Sheet (SRCSS) for chronically ill children, and evaluation. The learning support program was based on the ARCS model. We developed the learning support program based on the ARCS model, which was completed by 35 nurses. As a result, knowledge scores, treatment support behavior scores, and motivational behavior scores, which were used as outcome measures, all increased significantly, and nursing practice of treatment support toward independence for chronically ill children utilizing the SRCSS was promoted. In addition, the results of the interview survey of nursing managers suggested that the characteristics of hospital wards should be taken into account when disseminating the SRCSS in clinical practice.

研究分野：小児看護学

キーワード：慢性疾患 自立支援 自立度確認シート ARCSモデル 学習支援プログラム 看護療養支援システム

## 1. 研究開始当初の背景

慢性的な疾病を有する子どもの生命予後が改善し、継続的な医療を受けながら成長する小児期発症の慢性疾患患者が増加しており、近年、小児期医療から成人期医療への移行期を支援する移行期医療体制整備が行われている。また、平成 27 年より都道府県で「小児慢性特定疾病児童等の自立支援事業」が開始され、社会生活を支援する地域での取り組みの充実も図られている。慢性疾患児の移行期支援や自立支援は、子どもの発達や病気体験を考慮して、発症した幼少期より彼らのライフステージに応じた自立に向けた支援が欠かせない。しかし、前述した我が国における取り組みでは、この視点が不足しており、小児期を通して各ライフステージに応じた自立支援・療養支援としては十分ではない。また、それを可能とする療養支援モデルもこれまで開発されてこなかった。申請者らは、平成 25 年～27 年に慢性疾患児の療養や生活支援に関する先行研究の文献検討をもとに、小児期を通して子どものライフステージに応じて自立に向けた支援を行う療養支援モデルを開発した。そして、慢性疾患児の自立と親の子どもに対する自立支援状況をアセスメントする自立度確認シート (Self-Reliance Check and Support Sheet : SRCSS) の作成と実用化を図り、看護実践での活用と有用性を検討した(平成 27 年度厚生労働科研報告書)。本療養支援モデルは、小児看護専門看護師の協力のもと実践での試行を行って開発したが、地域社会で生活する慢性疾患児の自立に向けた療養支援を行うには、小児看護専門看護師ではなく、広く小児の看護を実践する看護師が活用できるものである必要がある。また、病院内だけでなく、支援だけでなく、病院と教育・福祉の場の看護職がともに行う支援体制が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、小児期を通して行う慢性疾患児の自立に向けた療養支援体制を構築することを目指して行った。今回実施する研究では、申請者らが開発した慢性疾患児の自立に向けた療養支援モデル(以下、療養支援モデル)を活用した慢性疾患児の自立に向けた看護職による療養支援システムを構築することを目的とした。

(1) ARCS モデルの枠組みを前提とした学習支援プログラムの開発にむけて、慢性疾患児の自立に向けた看護実践の実態と看護師の持つ背景的要因と学習意欲の関係を明らかにすることを目的とした調査を実施する。

(2) (1) の結果をもとに、療養支援モデル活用に必要な看護職のための教育教材作成と療養支援モデル活用のための学習支援プログラムを作成する。

(3) 療養支援モデル活用のための看護職対象の学習支援プログラムを実施し、教育を受けた看護職による療養支援の看護実践とその評価を行う。

(4) 学習支援プログラムに参加した協力施設の看護管理者に面接調査を行い、療養支援体制への影響を明らかにする。

(5) 学習支援プログラムの参加者の評価をもとに、療養支援に活用できる看護師向けの療養支援ガイドと慢性疾患児の自立と家族の自立支援に役立つ患児・家族向けのハンドブックを作成する。

## 3. 研究の方法

### 1) 小児関わる看護時の実践状況と学習意欲の調査

慢性疾患児が親や医療者からライフステージに応じた自立に向けた適切な支援が受けられることを目的に開発した療養支援モデルおよび慢性疾患児の自立度確認シート活用の臨床適用と普及に必要な学習プログラムを開発するために、全国の小児総合医療施設、小児科を標榜する大学病院および国公立病院の小児病棟(小児科病棟および小児科混合病棟を含む)、小児科外来に勤務する看護師を対象に無記名自記式質問紙調査を行った(宮崎大学医学部医の倫理委員会 0-0365)。主な質問項目は、対象者の基本属性と、ARCS モデルに基づく学習意欲(注意、関連性、自信、満足感)、自立度確認シートを基に作成した実践項目(子どもへの支援: 37 項目 5 件法、親の支援: 40 項目 5 件法)である。看護師の背景との関連、および学習意欲(ARCS モデルを前提とした学習意欲の下位項目【注意】、【関連性】、【自信】、【満足感】)との関連は、Kruskal-Wallis 検定、Mann-Whitney 検定を行った。有意水準は両側 5%とした。

### 2) 看護師を対象とした学習支援プログラムの開発

1) の調査結果をもとに ARCS モデルを前提とした学習支援プログラムの教材を作成するとともに、学習支援プログラムを開発した。

### 3) 学習支援プログラムの実施と評価

小児の関わる看護師を対象として、学習支援プログラムを実施し、看護実践活動への効果の評価した(宮崎大学医学部医の倫理委員会 0-0395)。評価のための調査項目は、属性、SRCSS を活用した療養支援に関する知識、療養支援行動、動機づけ行動とし、プログラム開始時、3 か月後、6 か月後、12 か月後にデータ収集を行った。各得点について Wilcoxon の符号付順位検定を行っ

た。有意水準は両側 5%とした。また、看護管理者に対する面接調査を行い、当該部署における波及や実践への影響についてデータ収集を行った。

#### 4. 研究成果

##### 1) 小児に関わる看護師の実践状況と学習意欲の調査結果

67 施設 416 名に配布し、164 名から回答が得られた (回収率 39.4%)。

(1) 子どもへの支援状況：発達段階ごとの実践割合 (看護実践状況の「している」「時々している」)は、【乳児期・幼児前期】89.6%、【幼児後期】89.0%、【学童前期】89.6%、【学童後期】80.6%、【思春期】77.1%であり、発達段階が上がると実践割合が低下する傾向があった。看護師の背景では、配属希望の有無 ( $p<.05$ ) 配属先 ( $p<.01$ ) 病棟の形態 ( $p<.05$ ) により看護実践状況に有意な差が認められた。

(2) 親への支援状況：看護実践状況「している」の割合は、発達段階では、【乳児期・幼児前期】38.2%、【幼児後期】27.2%、【学童前期】29.2%、【学童後期】26.1%、【思春期】20.4%であった。項目ごとにみると幼少期に [疾患の理解][自己決定能力の育成]の実践割合が高く、学童前期で [自己管理の促進]が高い一方で [児童の社会参加と関連機関の連携]は低値を示しており、実践状況として低かった。

(3) 看護師の学習意欲との関連：ARCS モデルの【注意】【関連性】【自信】【満足感】のうち、【関連性】の項目が低く、自立支援を行うことの必要性を認識していることが明らかとなった。自立に向けた療養支援に対する学習意欲はあるものの知識やスキルを十分に活用できていないことが考えられた。ARCS 合計得点は、小児経験年数、配属希望の有無、病棟の種類による差が認められた。また、自立に向けた看護実践状況として「該当なし」の回答がなかった 89 名を分析した結果、子どもへの支援と親への支援ともに 75~90%が実施しており、子どもへの支援よりも親への支援のほうが低い傾向があり、子どもの発達段階があがると低くなっていった。また、看護師の配属先希望の有無、配属先、病棟の形態により実践状況に差異が認められた。

これらの結果は、学習支援プログラムでは看護実践場面をもとにした討議とその後のフォローアップが必要であることを示していた。

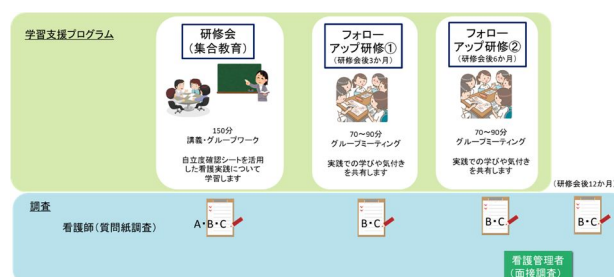


図1 学習支援プログラムとデータ収集スケジュール

##### 2) 看護師を対象とした学習支援プログラムの開発

申請者らが開発した慢性疾患児の自立にむけた療養支援モデルは、小児期を通してライフステージごとに 6 つの支援領域における慢性疾患児の療養行動とそれを支援する保護者の療養支援行動を示した自立度確認シートを活用して、ケースのアセスメント、介入、評価を行う療養支援モデルである。

学習支援プログラムは、自立度確認シートを活用した看護実践に必要な知識とスキルを実践するとともに、自己のスキルを開発できるように学習を支援するプログラムである。インストラクショナルデザインの一部である ARCS モデルを前提とした(1)の調査結果に基づいて開発した。まず、学習支援プログラムのための教材として、自立度確認シートを使用する療養支援モデルに関する講義資料、自立度確認シートを活用した看護実践のモデルケースの動画を作成した。また、看護実践に活用できる実践を支援するための療養支援ガイドと慢性疾患児とその家族が利用できるハンドブックを作成した。

学習支援プログラムは、自立度確認シートを活用した療養支援に必要な知識とスキルを具体的支援場面の動画から学習する集合研修と、3か月後、6か月後のフォローアップ研修とで構成した(図1)。フォローアップ研修では1組5名程度のグループを構成し、前の研修以降の看護実践での活用や実践の振り返りおよび体験の共有を行った。実践でのスキル向上を目的に SRCSS による実践経験のある小児看護専門看護師をファシリテーターとしてグループワークを行った。

##### 3) 学習支援プログラムの成果と評価

学習支援プログラムには、4施設35名の看護師が参加し、32名がプログラムを完遂した。学習支援プログラムの3か月後、6か月後フォローアップ研修実施時期は当初、ずれは1ヶ月程度と計画していたが、コロナ禍による影響で、2回目フォローアップ研修を9か月後に行うこともあった。また、対面での研修を計画していたが、一部はオンラインでの実施となった。

参加者の性別は女性32名、男性1名であり、病棟勤務20名、外来勤務12名、小児看護経験年数は、5年未満3名、5-10年未満5名、10-20年未満10名、20年以上4名であった。

参加した看護師は、学習支援プログラム中に日常の看護実践で、慢性疾患児に対して、自立度確認シートを活用した自立支援のための看護実践を行った。患児の疾患は、慢性腎疾患、神経・

筋疾患、慢性呼吸器疾患など多様であり、患児の年齢も様々であった。

自立にむけた療養支援の実践の成果指標とした知識得点は回を重ねるごとに高くなっており、開始時 7.5[4.25-9.75](median[IQR])と比較すると、9 か月後 15.0[14.00-18.00]( $p=.005$ )、12 か月後 18.0[15.50-21.00] ( $p=.002$ ) と有意差が認められた。療養支援行動得点は、開始時 26.0[19.50-35.5]と比較すると、9 か月後 38.0[33.00-41.00] ( $p=.006$ )、12 か月後 43.5[38.50-45.00] ( $p=.003$ ) と有意差が認められた。動機づけ行動得点は、開始時 34.0[31.25-41.50]と比較すると、9 か月後 43.0[37.00-47.75] ( $p=.066$ ) と有意差は認められなかったが、12 か月後では 48.0[47.00-51.00] ( $p=.003$ ) と有意差が認められた。

自由記載からは、年齢の高い中高生に対するアプローチがしやすくなったこと、子どもと親の両方へのアプローチをすることができるとともにその重要性を感じたことなどの実践の変化や病棟内での多職種と連携協働する上で役立ったことが述べられていた。

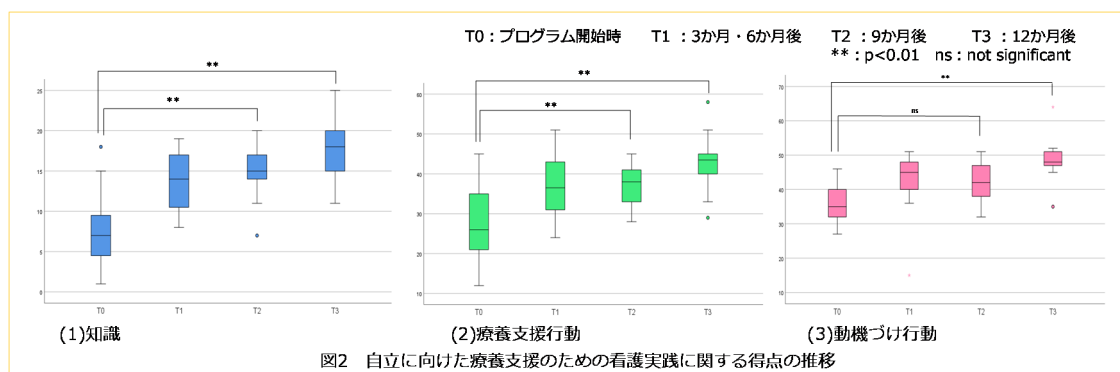


図2 自立に向けた療養支援のための看護実践に関する得点の推移

また、施設内での波及等の影響を明らかにする目的で行った看護管理者の面接調査では、看護管理者からみた影響として看護実践の大きな変化については語られなかったが、参加した看護師の病棟内での取組みが見られたことなど個々の実践の変化があり、慢性期病棟では病棟目標と一致していたことで病棟の看護の質の向上につながったことが語られた。

これらのことから、本研究で開発した学習支援プログラムによって、小児看護の経験年数を問わず自立度確認シートを活用した療養支援モデルを適用した看護実践が可能となるとともに、慢性疾患を中心とした実践を行う場や小児看護の経験が長い看護師がプログラムに参加することにより、その実践状況に応じた適用が可能となることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 野間口千香穂, 及川郁子, 林亮, 荒武亜紀, 西田みゆき, 仁尾かおり, 齋藤身和, 近藤美和子, 黒田光恵, 水野芳子
2. 発表標題 慢性疾患児の自立に向けた療養支援のための看護実践パフォーマンス向上学習支援プログラムの実施と評価
3. 学会等名 日本小児看護学会第32回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野間口千香穂
2. 発表標題 慢性疾患をもつ子どもの支援 - 子どもの自立にむけて、周りの大人ができること -
3. 学会等名 令和4年度子どもの健康に関する講演会（宮崎県中央保健所）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 林亮, 野間口千香穂, 仁尾かおり, 西田みゆき, 及川郁子, 荒武亜紀, 奈須まどか
2. 発表標題 小児期に関わる看護師の自立支援に関連した 学習意欲に関する調査 -ARCSモデルによる分析-
3. 学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田みゆき, 野間口千香穂, 仁尾かおり, 及川郁子, 林亮, 荒武亜紀
2. 発表標題 慢性疾患児の自立に向けた看護実践の実態 - 親への支援 -
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 仁尾かおり、野間口千香穂、西田みゆき、及川郁子、林亮、荒武亜紀
2. 発表標題 慢性疾患児の自立に向けた看護実践の実態 - 子どもへの支援 -
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koiri Nio , Chikaho Nomaguchi , Miyuki Nishida , Ikuko Oikawa , Ryo Hayashi , Aki Aratake
2. 発表標題 Nursing practice for the independence of children with chronic illness from infancy to adolescence
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Miyuki Nishida , Chikaho Nomaguchi , Kaori Nio , Ikuko Oikawa , Ryo Hayashi , Aki Aratake
2. 発表標題 Nursing practice for parent to independent of children with chronic illness
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

慢性疾患児と家族の療養行動を子どもの発達段階ごとに示した「慢性疾患のお子様と保護者のための自立支援ガイド」を制作発行した。
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西田 みゆき  (Nishida Miyuki)  (00352691)	順天堂大学・保健看護学部・教授    (32620)	
研究分担者	林 亮  (Hayashi Ryo)  (10712763)	順天堂大学・保健看護学部・講師    (32620)	
研究分担者	仁尾 かおり  (Nio Kaori)  (50392410)	大阪公立大学・大学院看護学研究科・教授    (24405)	
研究分担者	及川 郁子  (Oikawa Ikuko)  (90185174)	東京家政大学短期大学部・短期大学部・教授    (42681)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	近藤 美和子  (Kondo Miwako)		
研究協力者	黒木 光恵  (Kuroki Mitsue)		
研究協力者	齋藤 身和  (Saito Miwa)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金子 恵美  (Kaneko Emi)		
研究協力者	水野 芳子  (Mizuno Yoshiko)		
研究協力者	田崎 あゆみ  (Tasaki Ayumi)		
研究協力者	菅原 明子  (Sugahara Akiko)		
研究協力者	井上 由紀子  (Inoue Yukiko)		
研究協力者	荒武 亜紀  (Aratake Aki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関